

巻頭言

「アイデンティティ」を学ぶ

明治大学教授/協同総研副理事長 中川 雄一郎

「全国よい仕事研究交流集会」が今年も2月27・28日の両日にわたって開催された。私は昨年を引き続いて(第一)分科会のコメンテーターとして参加した。私は、この交流集会を、労働者協同組合(労協)の組合員がそれぞれの地域コミュニティで暮らしている人たちのニーズを満たすことによってコミュニティのニーズを満たしていく、という協同労働のプロセスが「よい仕事とは何か」を実感させ、その実感を根づかせていく——あるいはそうするために苦闘している——日々の実践や経験を研究する「場」である、と位置づけている。その意味で、この「よい仕事研究交流集会」は、労協のすべての組合員にとって、「協同労働の飽くなき追究」の一里塚(マイルストーン)でもある、と私は思っている。そのような思いで私は第一分科会の報告に聴き入った。個々人が協力し協同する現実と真剣に向き合って目標を眺望する様、言い換えれば、彼・彼女たちが常に派生する問題や課題に対峙して解決を図ろうと努力する様——すなわち、個人的行為の社会的文脈——は、^{はため}傍目にはより生き活きと映るのであって、報告者が発する言葉は、それ故、彼・彼女

たちの日々の実践と経験が「多様な像」として映し出される迫力を私に感じさせるのである。

昨年の交流集会の分科会でも同様の感想を持った私は、「協同すること」の社会的意味の何であるかを探る手がかりとして、『協同の発見』(2015年4月号)の巻頭言に「『協同』を学ぶ」と題した拙文を^{したた}認めたので、その一部を書き添えておく。

協同のアプローチは、民主主義に基礎を置くヒューマン・ガバナンス(人間的な統治)によって経営され運営される非営利・協同の事業と地域コミュニティで生活する人びとを結びつけることによって民主主義の規範を埋め込むことを可能にする。なぜなら、人びとは、個人としてもグループとしても、また自らの生活においても、さらには労働や事業においても、お互いに協力し協同することによって日々生活を営んでいるのだという「人間の^{いと}本来的な関係」を意識するからである。

そう、「協同すること」は私たちの日常

生活における「人間の本来的な関係」の表現に他ならないのである。このことは、労協の事業と運動——というよりも「すべての協同組合の事業と運動」と言うべきであるが——にも当てはまる。労協の言う「協同労働」とはまさに、日々の生活のなかで繰り返し取り結ばれる「人間の本来的な関係」の意識化の重要な一つの実現形態である、と言ってよい。その意味で、協同と労働は普遍的であると同時に多様であり、したがってまた、その価値——あるいは価値観——も普遍的であると同時に多様なのである（「多様」であることは「個別的」でもあることを意味する）。人びとの協同と労働と価値（観）のこのような普遍性と多様性（個別性）との間に橋を架ける役割を果たすのがアイデンティティである——労協であれば「労協アイデンティティ」である。

ところで、「アイデンティティ」(identity)は、日本語でその意味するところを簡単に表記できない用語である。それ故、アイデンティティの概念を理解した上でカタカナ表記にせざるを得ない。しかし、英和辞典は一般にアイデンティティを「自己同一性」・「独自性」・「個性」・「主体性」などと和訳しており、適切にその意味するところを捉えることは中々に難しい（比較的幅広く例示してくれている英和辞典は、例えば、a sense of identityを「一体感」と訳し、またcultural [ethnic, social] identityを「文化的[民族的、社会的]アイデンティティ」と表記した上で「特定の集団に属していると思う強い感情」との説明を加えている。若者は“identity card”がIDカード、すなわち、「身

分証明書」を意味することを知っているので、その訳からアイデンティティの意味を連想することができるかもしれない）。

社会学事典（弘文堂）はアイデンティティの概念を次のように説明している：「何かが変わるといふとき、すでにして変わらない何ものかが前提とされている。変わることのなかに保たれる齊一性、連続性の部分がアイデンティティ（同一性）の機軸である」。また「アイデンティティは『自分が何者であるか』の自己定義」、「取り替えのきかない自己の存在証明である」とし、さらに「アイデンティティの概念は自己・社会・歴史をつくりかえる過程を伴う自己の存在証明の働き」との説明を加えている。これらの説明はいずれも「労協（協同組合）アイデンティティ」には大いに参考になる概念である。

労協の組合員は、「アイデンティティの概念」を理解し認識することによって「労協アイデンティティ」を創り出し、そのアイデンティティに基づく「労協の事業と運動」の経済-社会的な機能と役割の重要性だけでなく、個々の組合員の「個人的活動（行為）の社会的文脈」の重要性をも自己意識化していくのではないだろうか、と私は考えている。なぜなら、労協の組合員による「よい仕事」意識の広がりや、非営利・協同の事業体である協同組合の価値観を確たるものにしていく努力のプロセスであることを意味するからである。

こうして「協同組合アイデンティティ」は能動的(active、積極的)市民のエートス(心

的態度)、すなわち、能動的(積極的)市民の「主体的選択に基づく行為性向」によって——「自治・権利・責任・参加」をコアとする——シチズンシップを、すなわち、「市民の関係のあり方」をより親密なものにしていくのである。そこで、シチズンシップ論・シチズンシップ教育論の権威者、故バーナード・クリック教授(ロンドン大学)が2006年4月に明治大学で行った講演「イングランドにおけるシチズンシップ教育」(中川記)の一節を記して「『アイデンティティ』を学ぶ」の筆を擱くことにする。

(中・高等学校の)新しいシチズンシップ教科の目的は能動的(積極的)でかつ責任感のある市民を生み出すことである。……生徒たちは彼ら固有の価値観と彼らのグループのアイデンティティを見だし、練り上げるよう奨励されなければならないが、しかし、イギリスには(ヨーロッパは言うまでもなく、広く世界中に)多様な価値観が存在する；国家的、宗教的、地域的、それに民族的な価値観であり、また古くから居る住民の多様性であり、新しい移民の多様性である。これらの価値観のいくつかをわれわれは共通して持ち、またいくつかを共通して持っていない。それ故、われわれの子どもたちは、等しく、他のすべての人たちの価値観を尊重するよう学習しなければならない。しかしながら、尊重することはあらゆることに同調することも、同じよ

うに^ほ寝め合うことも意味しない。若者に相対する際に(学生に相対する際ですら)われわれは、誤りを正し、偏見に対しては親切に——だが、しっかりと、確固として、かつ穏やかに——働きかけることを学ばなければならない。かのジャズマンが言ったように、「^む向きにならず、向き合せ」である。

イギリス社会の最も鋭い観察者の一人であり、英文学者・文学評論家で文化評論家のリチャード・ホガートは、最近次のように書いている：「資本主義の自然の推進力をコントロールすること、その推進力を資本主義に固有の目的に向けることは、開かれた民主主義の主要な、また避けることのできない本分である。足枷を外した資本主義は、いつかすべての人の物質的水準を高めるであろう——それも社会的コストの代価を払わずに、すべての人びとのためにより大きな社会正義を伴って——という最近の神話は、まさに次のことにすぎない。それは神話、危険な神話、そして有害な神話、これである。民主主義は、資本主義とともに生きながらえるかもしれないが、しかしそれは、民主主義の立場から発せられる言葉であり、条件であっても、資本から発せられるような言葉や条件ではない。民主主義は資本と親しくなければならない、というものではない。そうではなく、民主主義は資本に対して用

心深くして慎重な関係にあるのだ」。

またクリック教授は次のような思慮深いシチズンシップ論とシチズンシップ教育論の奥義の何であるかを私たちに示唆してくれた。最後に、彼のその言葉をここに記しておこう。

私は「(民主主義の資本に対する)用心深くして慎重な関係性」を善しとする。私は、シチズンシップのための教育は国家に対する一種の懐疑論(scepticism)——だが、事情に通じた懐疑論——を生みだすべきだと考えている。スペイン系アメリカ人哲学者のジョージ・サンタヤナはかつてこのように言っていた。「懐疑論は知性の貞節である。人は、生まれ現れ出る最初の一連の新思想に自分自身を捧げようとはしないものである」、と。だが、そのことなら、古くから言われてきたことである。われわれが読みそして聞くあらゆる事柄について言えば、ホガートの「批判的思考」こそが懐疑論なのである。懐疑論はシニシズム(皮

肉、cynicism)ではない。シニシズムはむしろ健全な社会の大きな敵であり、場合によっては教育の根を腐らしてしまふかもしれない代物である。シニシズムは多くの若者にこう言わせるのである。「(教師、ソーシャル・ワーカー、政治家、その他何であれ)彼らはみんな同じさ。われわれは、自分のことは自分で違^やるだけさ。他に何があるというのだ」。しかしながら、貧弱で不完全なままの自己こそ社会的ではないのである。われわれのまさにその「自己」とは「他者がわれわれをどのように見ており、われわれにどのように反応する^{コンストラクション}のか」という構成概念であり、また「自己」それ自体は「われわれが他者をどのように見るのか」という構成概念であって、「われわれが他者に反応し、他者に対して振る舞う素養をどのように身につけるのか」という構成概念なのである。このようなことを認識させるのが教育の真の目的ではないのか。健全な市民であること、また能動的(積極的)市民であること、それは自我(the self)にとって有益でさえあるのだ。